

## 青森中1いじめ自殺、焼香に訪れた校長が仏前でした“トンデモ発言”がヒドすぎる

週刊女性2017年1月3・10日号

2016/12/23

いじめ 自殺



男子生徒の遺骨は遺影とともに、いまだ自宅に置かれている

青森県・東北町で8月19日、中学1年の男子生徒（当時12）が、いじめを苦に命を絶った。

あれから4か月、一带は真っ白い雪景色に包まれていた。

「悲しいけどしっかりしなきゃと思い、学校を批判して、でも結局、自分たちを責めてその繰り返しです。最初と何も変わっていません……」

と母親は目に涙を浮かべる。

「本当ならこの時期は1日中、小屋の中で収穫した作物の選別を行うんですけど、なにも手につかないです」

と父親は言葉を絞りだした。

大切な息子が、自殺に追い込まれた。原因はいじめ。ところが学校側は8月26日に行った記者会見で、「対応に問題はなかった」と話した。

その後、学校のいい加減さは目に余るほど明らかになる。保護者からの訴えがなかったため、学校側は問題が収束したと判断し、教育委員会への報告を怠っていた。さらに驚愕の新事実が判明した。

「9月2日に第三者委員会ができて、その聞き取り時にいただいた資料では、息子が死にたいと話していたのを学校側が把握したのは、7月25日の“三者面談”となっているんです。息子が同席している場で、そんな話ができますか？ しかもたったの15分ですよ。このときは進路の話しかしていません、その1か月以上前に相談しています」

同資料によると母親は5月にいじめを知り、すぐに学校に相談した。しかし、学校側にその記録はなく、6月にいじめを把握したとしている。学校側は、三者面談で母親が「その後は（いじめは）大丈夫みたいだ」と話したため問題は解決したと判断したという。しかし、母親は「そんなことは言ってない」と話す。

仮に三者面談の日に「息子が死にたいと言っている」と相談していたとして、そんな深刻な問題がその日のうちに解決することなどあるだろうか。学校側の言い分は教育者とは思えないほど幼稚で、記憶もあいまいで、つじつまさえ合わない。

男子生徒が先生を頼ろうとしなかったのもうなずける。

第三者委員会の聞き取り前の9月に、校長と担任と学務主任が訪れたとき、母親はこんなお願いをした。

「息子の前ですから、第三者委員会では誠実に対応するよう約束してくださいって話をしたんです。そしたら“はい”って言ったんですよ。それが聞き取りではこうなっている……。学校は誠意を尽くしてほしい。誰がどう読んでも嘘だとわかる内容ですよ」

学校の不誠実な対応はまだ続く。月命日には校長や担任が焼香に訪れるのだが、

「私が“息子はパソコンが好きだった”と話すと、校長が“私もパソコンで馬券を買っています”と言うんです。馬券を買うのは自由だけど、仏前で話すことなのかって。この校長はやっぱりトンチンカンな人なんだなと、ほとほとアキレましたね……」

母親の言葉に怒気が帯びる。

「学校は許せない。なんでこんな人たちが先生でいることができるんだろう。そもそも生徒のSOSも受け取れない人は失格でしょう」



自室から見つかったメモには加害生徒への怒りの言葉などが

男子生徒が残したメモには、《いじめ←これがいちぼんの原いん》と書かれていた。

「どんなに時間がかかってもいいから、真相を明らかにしてほしいんです」

誰が男子生徒を追い詰めたのか。第三者委員会は年内に最終報告書をまとめる。

2016/12/25

COPYRIGHT © SHUFU TO SEIKATSU SHA CO.,LTD. All rights reserved.